

---

# すみこさん

粗目

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

すみこさん

### 【コード】

N9686X

### 【作者名】

粗目

### 【あらすじ】

カフェ白菊の看板娘、すみこさん（三毛猫。7キロオーバーの老嬢）と、店主海藤真が狂言回しを務める、主に二組のカップル（予定）の話。

一つ一つの話は直接繋がっていません。

## わたしはいま生まれた(前書き)

『すみこさん』のタイトルは全てWaltz with the  
Evils (<http://www1.bbiqu.jp/w2te/>)  
様よりお借りしております。

### 今回の登場人物

すみこ…三毛。体重7キロオーバー。たつぷり。

海藤真…35歳。カフェ白菊のオーナー。

白井啓介…32歳。去年七年連れ添った嫁と別れ、修羅場はもうこりこりだと独身宣言。文房具メーカーの営業。優男風だが変人というか変態。

藤堂高虎…35歳。真の幼馴染。大学卒業以来ずっと地元の信金に勤めている。凛々しい外見だけとお馬鹿さん。

わたしはいま生まれた

藤堂高虎。このどうしようもなく大仰な、そしてあまり良いイメージを抱かれない名前を親が何故つけたのかなど今更問うても意味はない。否、何故つけたのかなどは知っている。母親の名前、高子の高に父親が一番好きな動物の虎をあわせただけだ。

なんと安易なのだろう。

名づけた数年後、幼稚園で同名の武将がいることを聞かされるまで母はそんな人物が存在していたことなど知らなかった。高校時代に習った歴史には出てこなかった、と母は主張するが恐らくそれは間違いではないし、両親ともに歴史に興味を抱く人間ではなかった。それだけだ。

つまりただの偶然の産物。

彼が生まれて35年経った今でも、偶然付けられた名前にこだわっているのは本人だけだ。あとは時々いる歴史マニア。名前の由来など聞かれたところで、ただの偶然ですなんて、恥ずかしくって言えやしない。

「とうとう勤続十三年……」

「誇ることであつて落ち込むことじゃないだろ、馬鹿だねお前は」

勤続十年目は勤める信金があわや倒産か合併かという危機でそれどころではなく、そのまま忘れられたのだと思っていたら今日「遅くなっちゃったけど勤続十年おめでとう」と言われながら贈られた

時計は一応スイス製で、百万なんて馬鹿な値段ではないが普段着はユニクロの男にしてみればそれなりに高価なものだ。三年遅れの勤続十年記念。

高虎は腕に巻かれた黒革の時計を見てため息をついた。カウンタ―に頭を載せて落ち込んでいると、この店の看板娘に頭を踏まれた。御年いくつだか知れないが、そうとう高齢の看板娘、七キロオーバーの三毛猫は容赦なく高虎の頭を踏みしめ、ここぞ花道とばかりにカウンターをのし歩く。

ここが飲食店であることも高虎が客であることも意に介さない堂々とした歩きっぷりで花道<sup>カウンター</sup>を端まで歩ききると、カフェの主に目線をくれて、尻尾を一打ち。

それだけで何もかもが伝わるのか、真は「はいはい、下りるんですね」と猫を抱えて床に下ろし、一応は飲食店の主らしく、すぐに石鹸で丁寧<sup>に</sup>手を洗った。

夕方六時を過ぎれば客など殆ど入ってこない住宅街のカフェ白菊に客と呼べる人間は高虎しかいない。幼馴染の気安さで真は高虎をカウンターに残したまま閉店の準備を始めた。明記はしていないが真は大体六時ごろ店を閉めるから、常連ならば今頃の時間に入ってこないし、入り組んだ住宅街にある小さな喫茶店に、そもそも一見の客は滅多にやってこない。

それでもなんとかやっていけているのは、ネットで販売している焼き菓子が口コミで評判になっているのと、店で売っているケーキの売れ行きがいいからだ。売り上げとしては焼き菓子四割、生菓子三割、カフェ二割。残りの一割は週に一度知り合いの店に置かせてもらう生菓子の売り上げだと真は言う。

大体ケーキに比べてこの店で出す飲み物は不味いとまではいわな

いが美味くもない。恐らく、茶葉や豆、淹れ方に拘りのある人間からすれば、金を取られるのが理不尽な気がする味だ。

「なんだよまだ落ち込んでるのかよ鬱陶しいな」

店内にある椅子を上げてモップで拭き掃除まで終えた真は、未だにカウンターに頭を乗せている幼馴染に呆れた視線を向ける。カウンターの脇に置かれたシヨウケースは空っぽですでに掃除も済ませている。大体生菓子は三時過ぎには売り切れてしまうのだ。真はかがんでカウンターの下においてある冷蔵庫を開けた。開店前にサンドウィッチなどの軽食用にと用意したものだ。結局軽食はやらないことになったので、今では真の私物と成り果てている。

冷蔵庫の中にある、オペラの端っことクリームがはみ出したシュークリームが乱雑に乗せられた皿を出して高虎の前に置いた。

「リンツアートルテが食いたい」

「明後日焼くから金払って食いに来いよ。飯はどうする？」

「パンケーキ」

「飯の話をしてるんだよ阿呆」

名は体をあらわすのか、それとも外見は名に自然に寄り沿おうと  
いうのか、トウドウカトラなどという大仰な響きが滑稽に聞こえない、長身痩躯で顔だって地味に整っている男は、しかし名前も外見も裏切って武道を含む運動全般苦手しかも無類の甘いもの好きだ。放っておいたら朝はドーナツ昼はケーキ夜は大福とかいう食生活。自身パティシエとしてそれなりに甘味に愛はあるし量も食べられる真からみても、高虎の嗜好は胸が悪くなりそう。

しかも周囲には格好つけて晒さない弱さも、物心つく前から一緒にいる幼馴染の前では隠そうという気配りもない。正直言って真の手には余るが、甘いものを食べさせておけばそれなりにおとなしいし食べれば満足して少しは浮上するらしいので、可愛い看板娘に存分に踏まれた後には口スしたものを食わせるのにやぶさかではない。看板娘、すみこは猫の性なのか彼女の特質なのか、弱っているものを見ると踏まずにはいられない、らしい。それでも一見の客や馴染みのない客を踏んだことはないが、彼女にとっては下僕にすぎない真の幼馴染で、しかも落ち込みやすい高虎はいまやすみこの足拭きマットだ。時々どうみても落ち込んでないときですら、頭をかがませて踏んでいく。そこでおとなしく頭を屈める高虎が悪いと真は思っている。

フォークを使う気力もないのか手づかみでもそもそも、しかし熱心にオペラの端っこを食む高虎に濡らしたペーパーナプキンを放ってやって、真はグラスに指一本分だけウイスキーを注ぐ。カフェの開店時間は遅いが真の仕事は早朝から始まっている。一日の疲れがアルコールでじんわりとほぐされていった。

「アル中」

「うるせえ糖尿。別に会社に不満ないんだろ？ 一生勤めれば良いじゃねえか」

「トウドウタカトラだぞ？ 七回転職しなきゃ名前負けじゃないか！」

「七人の主に仕えたんなら六回転職だろ？」

信金勤めのくせに指をおって数え始める高虎を尻目に今日の分のご褒美を飲み上げ、グラスとついでにすっかり空になった高虎の皿

とカップを流しで洗う。シンクをきつちりと磨き上げてカフェでの仕事は終わりだ。これから奥の厨房で注文の入っていた焼き菓子を作らなければならぬが、それでもこの幼馴染にまともな夕食を食わせる時間くらいはあるだろう、と近所の小料理屋を頭に思い浮かべていると、高虎の携帯が鳴った。

聞き覚えのあるメロディ……、地獄の黙示録で使われて話題になったワグナーの……なんだったか、と真が思っていると同時に高虎が通話ボタンを押した。着信音をわざわざそんな音楽にしている相手が仲の良い人間や好意を持っている人間ではないのだろうか、それにして高虎の顔色は少し青ざめている。誰かに弱みを握られているのかトラブルにでも巻き込まれているのか、と心配になるほどだ。

短い返事と、あげかけた抗議だか拒絶を封じられた中途半端なうなり声だけで電話は向こうから一方的に切られたらしい短い通話の後、高虎は一層顔を悪くして低くうめいた。

「なんだよ誰だ」

「白井」

苗字をはき捨てるように言われて真はしばし考え込んだが答えはすぐに出てきた。ここから近いといえば近い、住宅街を抜けて五分ほど歩いたところにある文房具メーカーに勤める男だ。取引先や会社を持っていくと喜ばれるから、とこの店によく顔をだしては大量に生菓子を買っていく、月に何度かはコーヒーも飲んでいく男。数歳年下だが去年離婚したと言っていた。やけにさばさばした顔で『もう修羅場はこりごりですよ』などと言っていた。どれだけ凄惨な修羅場を経験したのか、そのさわやかな顔からは何も読み取れなかった男だ。

なんの因果か神のさいころが不良品だったのか、一ヶ月かそこから

前に一人でふらりと店にやってきて生菓子を大量に注文し、会計の時ついでのように『実は色々あって藤堂さんとお付き合いすることになったんです』と再び爽やかな顔で言っただけの男でもある。その『色々あった』内幕も、彼の笑顔からは何も読み取れなかった。

真は友人や客のセクシヤリテイをどうこう言う気はなかったのだから、『そうですか』で済ませた。実をいうとそれきり半ば忘れてもいたのだが、今名前を聞いて思い出した。

恋人からの着信に地獄の黙示録はないだろう。それとも白井が言った『藤堂さん』は真が知る別人なのだろうか。真が知る他の『藤堂さん』は高虎の母親くらいしか思い出せないが、母親が自分の息子より年下の男と付き合い始めたのなら、その相手からの着信が地獄の黙示録でもおかしくはないか、と思う。

「まあ、元気だせよ。おばさんだって今は独身なんだし若い男と付き合っくらいい…」

「はあ？」

「白井さんと付き合ってるんだろ、おばさんが」

「そんなわけあるか。あんなのを父さんと呼ぶくらいならあの男を殺して俺も死ぬ」

「なんかそれ違うんじゃないか。じゃあ白井さんが付き合っている藤堂って」

「はあ何あいつ、そんなこと言ったのかよ！」

「一ヶ月前。てっきりお前のことだと思っただけだ」

「俺のことだけど、幼馴染が男と付き合ってるって思ったならそれなりのリアクションをしてくれよ！」

「別にお前が男と付き合おうがそこらへんの電柱と恋に落ちようが関係ないから。うちのすみこさんに手を出さない限りは」

「……酷すぎる。幼馴染よりすみこさんのほうが大切なのかよ」

「どっちがより大切なんて言えないよ。俺にとってはどっちも大切だ」

「なんだその心のこもってない棒読み」

「いや慰めてほしそだったから。というか恋人からの着信が地獄の黙示録？ それでその暗い顔って何事だよ。首つつこみたくないけどどうしても話したいなら聞いてやるよ嫌だけど」

お前ソレ本当に嫌がつてんだよな俺にはバレバレなんだよ。と真が特に隠してもいないことを言い立てて高虎はちよつと唇を尖らせ（不満がある時に唇を尖らせるのは子供の頃から抜けない癖だ）、目線を落としてため息をついた。

「今日が付き合い始めて四回目の水曜日なんだつてさ」

「……一ヶ月つてことか？」

「知らん。一々覚えてないだろ普通。しかもあいつ、午後七時二十分に俺がOKしたからその時間に一緒に祝おうとか……怖いだろ！」

「ごめんちよつと鳥肌だった。怖いからお前さつさと帰ってくれな  
い？」

「俺だつて怖いよ！ 部屋帰りたくないから今日はお前のところに泊  
まらせてくれよ」

「何お前一緒に暮らしてるのか」

「いつのまにか合鍵持つてるんだよ……」

「……お前それ付き合ってるんじゃないかってストーキングされてるの  
間違いじゃないの？ ねえ、すみこさん」

閉店した店の見回りを終えたすみこが尻尾で催促するのに、抱き  
上げて再びカウンタに乗せる。と、すみこは高虎の頭に乗って二度  
三度と踏みしめた。きつといつもより負け犬臭が濃いな、と真

は思った。

存分に高虎を踏みしめたすみこは顔をあげ、なあう、と鳴いた。

滅多になかないすみこさんが珍しい、と顔を上げた真はガラス戸の向こうに『怖い男』、白井を認めて思わず顔が引きつった。そんな真の心中など知らぬ顔で、明るく染めた髪をいつものように隙なく纏め、十人中八人は「爽やか」とか「清潔感がある」と表す（残りの二人は「胡散臭い」というだろう）顔に笑みを浮かべてドア越しに、いまだにすみこを頭に載せている高虎を指差し、ついで自分の腕時計を指す。

約束があるんです、というようなジェスチャだったしそれも間違いいではないだろうが、今高虎から話を聞いたばかりの真は壁の時計をみやり、それがもうすぐ午後七時を指すのを認めた。

幼馴染との友情をとるか大得意をとるか。

真は悩むが、すぐに答えは出た。白井がガラス戸に触れ、鍵がかかってないことに気づいて入ってきたからだ。狭い店なので客が入ってくればすぐに分かるから、とベルの類を設置していないドアはかすかな軋み音と僅かな夜気だけを店に入れた。

白井はすみこさんのたつぷりした体を軽々と抱き上げ高虎の頭の上からどかし、すかさずポケットから小さなジップロックに入ったすみこさんの大好物である伊勢源のかまぼこ（無添加・無着色・手作り）を出し、小さくちぎって少量を与える。塩分の取りすぎは体に良くないから、ほんの少しだ。

高虎がいるだろう場所を察知して、真ではなくすみこに対する心

づけを、それも健康に配慮した量を与えるという細やかな心遣いに、真の天秤は大きく傾いた。白井の姿を認めた高虎が顔を青くしようが知ったことではない。

「藤堂さん、時間になってしまいましたよ。さあ今日は俺の家に帰りましょう、ラフレシユのチョコレートがありますよ、丸福の水羊羹も買ってきました」

「ラフレシユ…いや、きよ…今日は」

「ドウアツシエのリンツアートルテも」

「ええ…？ じゃあ、ちよつとだけ…？」

「さあさあ急がなくては間に合わない。人の細胞は四週間で生まれ変わるんですよ、あの時から全て新しく生まれ変わったあと三十五分後に一緒にいなくてどうするんですか。あ、海藤さん、明日生菓子二十個、十一時に用意できますか？」

「毎度ありがとうございます。じゃあな高虎」

「あ、ちよ！ 裏切り者…！」

いつのまにかテーブルの上に置かれていた四百円は高虎のコーヒ一代だろう。つむじ風のように幼馴染をひったくっていった男のそのなさど強引さにかつての修羅場のすさまじさを垣間見た。あんな男と恋愛沙汰は怖い。なんだ四週間で細胞が生まれ変わるって。怖え、と改めて鳥肌をたてながら、真はすでに車に乗せられて姿の見えない幼馴染の為に短く合掌した。

「なんか仕事する気分じゃなくなったな。俺たちも帰りましょうか、すみこさん」

あとは成形して焼くだけの状態になっている焼き菓子だ。明日の

朝やっても間に合うだろう、と真は手早く厨房の片付けをし、ばすけつとに柔らかな餅のようなすみこを流しいれる。すみこはとろとろと肉をゆらしながらバスケットの中に納まった。そのすみこ入りバスケットを自転車の荷台に固定し、真は自転車で十分の自宅に戻るべく、ペダルを漕ぐ。明日も白井は爽やかだろうし、今度来るときも高遠はきつとすみこの足拭きマットだろう。ああ菓子作りたいな、と真は思った。

主を変えられない男に捧げるリンツァートルテ、なんてどうだろう。

## 節度のない恋（前書き）

今回のタイトルもWaltz with the Evils様にお借りしています。太宰讃選（17題）の2話目です。

### 登場人物

海藤新：29歳。真の弟。エロとホラーの境を行き来する漫画家。売れ行きは微妙だが売れていないともいえない。カフェに入り浸り、忙しい時は手伝いなどもしていく。

新見シド：19歳。大学生。カフェ白菊のアルバイト。シド・ヴィンセントのファンで履歴書にもシドと書いて真にハーフだと思われた。すみことは犬猿の仲。

## 節度のない恋

真は差し出された履歴書を前に困惑していた。

「ええと、新見、シド君？ 十九歳の、梅檀大学の二年生、ですか。自宅からでも大学からでもここまで自転車で来られる距離ですね」

ここは重要だ。小さな喫茶店でアルバイトを雇うのに交通費が高くついてしまつては元も子もない。しかし真の困惑はそんなところから来ていたのではなかった。

どうみても東洋人にしか見えないのは別に良い。日本以外のアジアの血が入っているのかもしれないしそういう国で本名とは別に英語名をつけるのは別に珍しくないと聞く。シド、という名前は目つき鋭い彼に似合つてもいた。

しかし真が募集したのは「女性アルバイト」だ。ケーキの販売を主とするカフェだというのに、常時働くのが三十過ぎの真一人ではあまりにさびしいだろうと、真の弟である新に強く言われて募集したアルバイトだった。実際、平日の昼過ぎまでと土日は一人で手が回らなくて新に手伝わせていたりもしたから、そろそろアルバイトの雇い時だろうと思っていたし。

真としては男だろうが女だろうがどちらでも良いのだが、女性限定で募集したに等しい張り紙を見て応募してきた新見シドと名乗る、男にしか見えない人間を前に、「君は男性にしか見えないけど本当は女性なんですか？」なんてデリケートなことを聞いていいのかどうかと困惑するばかりだ。

下手をすれば訴えられてしまう。

「本当は彬って名前なんですけど、シド・ヴィシャスが好きだからシドって名乗ってるんです」

どうしよう！ 声まで男らしい。喉仏もはっきりある！

「えと、履歴書はきちんと本名で書いたほうがいいです、ね」「すみません」

性別に関する質問がしにくいのに加えてシド・ヴィシャス好きだなんてどこからどう突っ込めばいいのさ、と真は痛んできた頭を抱えながらももう一度履歴書をじっくりと見直し、先ほどは見落としていたが、性別、男にしっかりと が付けられているのを確認した。こんな項目があることすら見落としていた。三度見直して、間違いなく男性のところに がしていているのを確認した。

よしオーケー、と内心ガッツポーズだ。これで「女性なんですか？」なんて馬鹿な質問をしなくて済む。第一関門突破だ、なんの関門かも分からないが。

ともかくほつとした真は、これ以上誰かを面接してまたこんなにあわあわせられるのはごめんだと思った。

なので新見シドをその場で採用した。一人目の面接でここまでぐったりさせられて、二人目に臨む気力が沸かなかったのだ。

後日弟の新に「なんで可愛い女の子じゃないの!？」と嘆かれ罵倒されたのはまた別の話だ。

新見シドは明るいわけではなくどちらかといと寡黙なほうだったが、遅刻もしたことなく、やむをえず休むような時は必ず代理を超越するような律儀でよく気がつく青年だった。シド・ヴィンヤスが好きだといったわりにロツクの精神を熱く語ることも破壊的衝動に駆られることも体中をピアスをすることもなく攻撃的なファッションに身を包むわけでもなく、服装はどちらかというと大人しめだ。顔や手でなければ、見えないところにピアスをしていようがいまいが真の関与することではない。

良いアルバイトを雇った、とその思いは一年過ぎた今でも変わらない。

ただ一つだけ困ったことがある。

違った、二つ、困ったことがある。

一つ目は、シドとすみこが犬猿の仲なことだ。すみこさんは犬でないしシドは猿顔ではないのだが（どちらかという爬虫類顔だった）、ともかく仲が悪い。シドが店に入るのは平日週二回と土日の九時から十三時までなのだが、シドが働いている間すみこは店の外のテラスか、天気が悪ければ裏の厨房にこもりつきりだ。シドはシドで、すみこの姿が目に入ると鋭い目つきでにらみつけてくる。とうなつて威嚇する。

シドとすみこ、どちらからも『あなたはどっちの味方なの？』なんていわれたことはないが、真は一人で勝手に嫁と母親に挟まれた夫の気持ちになっていたりする。

そして二つ目は、真の弟、新のことだった。

真の弟、海藤新は漫画家だ。大学時代に投稿作が雑誌に掲載され、八年目の今年までに出版された単行本が五冊、月刊誌に一本連載を

持っている、売れているとはいえないけれど売れていないともいえない、新曰く「とりあえず結婚しても子供が一人ならなんとか暮らしていける」程度の稼ぎだというから、まあ好きなことを仕事に出来ている幸運な人間な一人だろう。

その新が、シドをモデルにしたいと半年前から熱烈オファー中なのだ。

ちなみに新の描く漫画はエロかグロかホラーか分類は出来ないがどちらかという年齢制限アリの棚に置かれるほうが多い内容のもので、モデルになってといっても内容は決して青春的な恋や友情や熱いバトルではない。

「もうさー、絵コンテまで出来てるの。あとはシド君がいさぎよくぱっぱと脱いでくれればいいだけだから」

「いいだけだから、じゃないんですよ。俺ぜってーやりませんから！」

「なんでー？ バイト代だすよこの一か月分くらい出しても良いよ。ぱっぱと脱いで足開いてくれたら触手は勝手に想像で描くからさあ」

「うわああ！ ぜってー嫌ですから！」

聞きたくない、とシドが耳を掌でふさいで叫ぶその気持ちは真も良く分かる。真とて今すぐ耳を洗浄したい気分だ。今お客さんがいなくて良かった、と十二時の日差しが差し込むカフェを見て思う。

この時間、フードメニューを提供しないカフェ白菊はエアポケットのように客足が途絶える。

毎日七種類のケーキと少量のクロワッサンを置くだけの店でイトイン、というにはカフェスペースは大きく、四人掛けテーブルが窓際に二つ、壁際に一つ、それに五人座れるカウンターがある。もつともカフェが満席になったことなど開店以来一度もないし、誰も

いないことのほうが多い。

今日も、朝から数えてもカフェの客は今、壁際のテーブルを一人で占領している新だけだ。

でもお客が一人もいなくてもいいから、新はもう帰ってくれないかな、と真は思う。

開店と同時にやってきてテーブルに如何わしい資料やらノートやらをばら撒き、コーヒーとクロワッサンで長居する。別に長居するのはちつとも構わないが、そうするのは計ったように週四回、シドがアルバイトとして入っている時だけだ。それ以外の日も入り浸ってはいるが、その時は「そんなもんを昼間見るんじゃない！」と言いたくなるような『資料』は広げないし、持っているのはせいぜいスケッチブックだ。描く漫画はアレだが一応プロなので画力はあるので、彼の描いたすみこさんは簡単な彩色をされ額に入れられ、店のあちこちに飾られている。

絵を描いていない時は文庫本を読んでいたりと、店が忙しい時は手伝ったりもしてくれる。シドよりよほどロツク魂にあふれる外見をしている男……左右の耳に合わせて七個、唇の端にピアスをして錆色の髪をしている……男がケーキを売る姿はシユールだと思うが、意外性が受けるのかそれもお客には好評だったりするから世間様というものは分からない。

そんな新がシドをモデルにして描きたいといっているのが触手モノ。美少女や美熟女があんあん言われる、昔から一定の需要を持っているジャンルだがシドは男だし大体新の描く漫画がただのエロマンガであるはずもない。

最初にオファーがあった時からシドは嫌がっていたし、真も力一杯自分に遠慮しないでいいから断れ、と言っている。

「シド君、今日はもう上がっていいよ、暇だし」

「ありがとうございます！」

「シド君バイト終わり？　じゃあちょうどいいからこのまま僕の部屋においでよ」

「絶対行きませんか！」

逃げるように裏に駆け込みエプロンをむしりとつただろう速さでシドが店を遠ざかるのを新は残念そうな顔でみている。真が弟の持つカップにコーヒーを継ぎ足してやると、「嫌がらせ？」と言われた。

「サービスだ。お、すみさんお帰りなさい」

「サービス言うほど兄貴のコーヒー美味くないじゃん。すみさん、相変わらずシド君と仲が悪いねー」

ねー、と言いながら差し出した新の手におとなしく運ばれ、手早く『資料』を片付けたテーブルの上に乗せられたすみこは、ふう、とため息のように息をついて新の指を噛んだ。

「ちゅうされちゃった」

「馬鹿だね。噛まれたんだよ」

「いや甘噛みだから、愛情表現愛情表現でいてっ！」

「甘噛みじゃなくて様子見だったんだろ」

血が出るほどではないが牙のかたちにくつきり窪んだ指先をナプキンでぬぐいながら「酷いよすみさん、指は漫画家の命だよ」などと言っている新を尻目にすみこはシドの姿が見えないことに満足し、テーブルの上にとんと横たわった。とろ、と周囲に柔らかかな肉がなだれる。

ああこの感触この感触、と新がすみこを撫でては目じりをだらしなく緩ませている。真は残り少なくなってきたケーキを纏め、シヨ

ウケースのガラスを拭きあげた。

そろそろお客さんが入ってきてもおかしくない時間だ。

「シド君に辞められたら困るからほどほどにしろよ。つか諦めるその変態漫画をシド君で描くのは」

「いやーだつて理想通りなんだもの。簡単に諦められないでしょ」

「どんな理想だよ」

「あ、聞く？ 俺の代表作になりそうなストーリーを。あのねシド君が男子校でね」

「やめる耳が腐る」

「腐らないよ最後は純愛なんだから。いつも思っけど兄貴このコーヒーで金取ってるのって詐欺だよね」

「不味くないだろ」

「不味くもないけど美味くもない」

「純愛？」

「そう」

自信満々で頷かれて真のほうで困る。すみこは困っていない。もつと撫でると新の手を尻尾ではたいて催促をしている。

すみこの要望にこたえて撫で回しというか肉を揉み解しながら新はもう一度大きく頷いて言った。

「純愛。触手で拷問で遣りたい放題の節度のない愛」

「お前最低だね」

「えへ」

「可愛く笑つな変態漫画家」

「あ、兄貴。お客さん」

指差す方、ガラス戸の向こうに確かに客を認めて真はすばやく営業スマイルを浮かべる。その際にテーブルを片付けカップを勝手に

シンクに置き、新は重たい鞆を肩に掛けてコーヒー代をレジに放り込んだ。

すみこは撫でる手がなくなったことを残念に思ったのか、それとも何も思っていないのか、たっぷりとテーブルの上で伸びている。

真は客に言われるままケーキを箱に詰めながら弟の言葉に混乱している。

## 疾風のごとく逃げ失せる（前書き）

今回のタイトルもWaltz with the Evils様にお借りしています。

太宰讃選（17題）の3話目です。

### 登場人物

新見シド：19歳。カフェ白菊のアルバイト。シドヴィシヤス好きの片鱗も見えない。

海藤新：29歳。漫画家。わりと普通の男らしい。

藤堂高虎：35歳。サラリーマン。あほのこ。

白井啓介：32歳。サラリーマン。腹黒というか変態。

## 疾風のごとく逃げ失せる

シド君？

そう声を掛けられたのは大学の門のすぐ近くだ。シドは弁当の入ったコンビニの袋を片手に大学に戻ろうとしていたところを、背後から声をかけられて振り向いた。

そこには見た覚えのある顔があったので、とりあえず小さく頭を下げた。シドのバイト先であるカフェ白菊で見る顔だったが、名前には知らない。明るい色の髪が似合う優男だ。スーツを着こなす様子の良い男は大学には滅多に居ないので、ちらほらと視線を向けられているが気づいているのかいないのかまるで頓着していない。シドのほう気が詰まりになって、居心地悪げにみじろいだ。

そんなシドの心中をも忖度することなく、男はにこにここと笑って近づいてきた。

「ちょうどよかった。近いうちに白菊に行く？」

「明日行きますけど」

「悪いんだけどこれ海藤さん…、店長に渡しておいてくれる？ 白井から預かった、て言えば分かると思うから。あ、全然急がないから」

そういつて渡されたのは多分どこかの家の鍵だった。白井は、あ、このままじゃまずいか、とビジネスバッグの中から茶封筒を取り出して鍵をいれて再びシドに渡したが、こんなプライベートルなものも渡されても困る。話の流れ的には真の家の鍵なのだろうが、明日になっても良いということはスペアキーだろうか。こんな個人的なも

のは自分で渡してくれ、と色々思ったが相手は客だ。シドは一つ頷き、茶封筒を受け取った。

白井は急いでいるらしく「ごめん、ありがとう」と言いながらすぐに駅に向かって早足で歩き去ってしまった。

そのスピードと有無をいわさぬ強引さに、つむじ風が吹いたみたいだ、とシドは思った。

つむじ風から渡されたのはまがりなりにも鍵だ。明日バイトにくから、と言ってもそれまで持っているのもなんとなく人の私生活の一端を握っているようで気が引けるし、さっさと手放してしまいたいのが本音だ。

どうせ暇だし、とシドは講義の終わった午後四時すぎにアルバイト先に向かった。

「あれ？ シド君どうしたの？」

「こんにちは。これ白井さんが店長につて。白井さんから預かっていえば分かるって言われたんですけど」

「なんだろ。鍵……？ 俺に？」

「店長に、言ってみましたよ。心当たりないですか？」

「うーん。ないけど、白井さんがわざわざシド君に渡したってことは俺宛で間違いないだろうし。今度白井さんがいらっしやったときにでも聞いてみるよ。わざわざありがとう。急いでなければコーヒーでも飲んでいきなよ。売り物は全部売り切れちゃっただけけど、ロスしたのでよければケーキもあるよ」

「あ、ありがとうございます」

「今日一緒にメシくう約束したから、そのうち新も来るんだけど」

「すみません俺やっぱり帰ります」

「いや大丈夫。今日はシド君が居るとは思っていないからわりと普通だと思っよ多分。新の驚いた顔も見たいし、もうちょっと居てくれよ。良かったら飯も一緒にどう？」

「いえ、それは。俺の見てるあの人って」

「昼間っから店のテーブルに成人指定の写真集ばんばん広げてエロマンガの台詞とか効果音とか口ずさみつつ漫画描いてるのが奴の普段の姿じゃ無いということ。まあ締め切り近くて、時々それが普段の生活になっちゃってる時もあるかもしれないけど。あれだね、シド君の気を惹きたくてもしょうがないんだよね、気になる女の子に蛙の死体とか見せ付ける男の子と一緒に」

「それ、すっげえ迷惑なんですけど」

「頑張つて。新は諦めの悪さと粘り強さでプロになったようなものだから、ものすごく打たれ強くて諦めない人だけど頑張つて」

心のこもってないエールをもらってシドは、この兄弟本当嫌だ、と思いつながら出されたコーヒーを飲んだ。まだ閉店まで二時間近くあるというのに客は誰もいない。店の外から見えるショウケースがすでに空っぽで綺麗に掃除されているので、持ち帰りの客も来ないだろう。真はすでに簡単な掃除を始めており、多分新が来たらその時点で閉店なんだろうな、と知れる。事実、真は「もしもお客さんがきたら適当に注文聞いておいて」と言つて裏の厨房に入つていつてしまった。勤務時間ではないがアルバイトなので仕事をするのは良いが、あの口ぶりでは絶対にお客さんが来ない、と断言しているようなものだった。

朝夕は少し肌寒くなってきたが四時過ぎではまだ外は明るい。店長には悪いが新の驚く顔を見るためだけにここにいるのも間が悪いし、コーヒーを飲み上げたら掃除でも手伝って帰ろう、とシドが思

つっていると、さら、と少し冷たい風が入ってきた。お客さんだろうか、と振り返ると新がいる。

なんとというか、普通だ。

シドは思った。錆色の少し長い髪と白い顔色、耳や唇に隙なくピアスした時代遅れのロツカー風な外見は変わっていないのだが、中身が普通そうだった。外見を見て傍に寄るのをためらう人間はいるだろうが、いきなり人の部屋に上がりこんできて、人の借りたA Vを勝手に見ながら、長々と講釈をする男には到底見えない。

一体どんな外見の人間ならばそんなことをしそうだと思われるのかシドにもよくわかっていなかったが、この半年以上、シドにとって新はそういう人間だった。

なんだか初めて見るような気がしてじっと見つめていると、扉の前で硬直していた男はどかどかとシドの座るカウンターまでやってきて……そこを通り過ぎて裏の厨房に飛び込んでいった。ぶつけて落としたのか金属製のポウルやなにかが床に落ちる音がして真の罵声が聞こえる。火を使うから、と厨房は木造の店舗よりも大分しっかりしたコンクリートの壁で作られている。だから防音とまでは言わないが、言葉が明瞭に聞こえるほど筒抜けではない。二人が（というか新が一方的に）怒鳴っている声も、怒鳴っているのは分かるが内容までは詳しく聞き取れないし、聞き耳を立てるものではないだろう。

コーヒを飲み上げて使ったカップを洗い、少々手持ち無沙汰になった、と思っただら今度はばん！ と叩きつける勢いで扉が開かれた。

「真！ 助ける！」

「……………、あ、ええと……………、藤堂さん」

「シド君？ 真どこにいるの否いなならシド君でもいいやお願  
今日泊めて、玄関でも風呂場でもどこでもいいよ！」  
「一応客用布団もあるので部屋で寝てくれていいんですけど……、  
店長呼んできますから座ってください。今裏にいますんで」

わざわざ断らなくても厨房の物音は聞こえているが一応断って、  
シドは厨房のドアを開けた。

真の襟首を新が掴み上げて怒鳴っていた。一見するとチンピラに  
絡まれている風だが、真の顔に全く危機感がないので、どちらが優  
勢なのか丸分かりだ。

シドは首だけ中に入れて、目があった真に「藤堂さんがいらっし  
やいました。何か困ってるみたいですよ」と伝える。真はそれを聞い  
て襟首を掴む弟の手をたやすく外した。するりとシドの傍と通り抜  
け店に戻る。

シドと目があった新はばつのわるい顔をして真の襟首を掴んでい  
た手を握ったり離したりしていた。それを認めて、シドもすぐに店  
に戻る。

「高虎が困ってたり落ち込んでたりするのはいつものことだから」

「はあ、…？」

「高虎、今日は何に困ってるんだって？」

「鍵がないんだ、家の鍵。昨日はどうしようもなくて白井のところ  
に泊まったんだけど」

「なんで白井さんのところに行くのかな。馬鹿だねお前は」

「だってあいつ俺の家の鍵持ってるから」

「それってアレだろ、勝手に作られた合鍵。素直に差し出すとでも  
思ったのか。あ、新。店の掃除しておいてくれ」

「分かった。後で覚えてやがれクソ兄貴」

「お前もいい加減死んだ蛙を振り回すような真似をするんじゃない  
よ、すみこさんを見習え」

真の「すみこさんを見習え」は相手を窘めたい時に使われる口癖のようなものだ。あのデブ猫の何を見習えというのか、とたまに真から言われるたびにシドは困惑するが、それは真の弟であり、すみことも長い付き合いだろっ新にとっても同様なようだった。

名指しされたすみこはシドが店に姿を現した時点で厨房に引っ込んでいる。

結局、すみこのどんなところを見習えばいいのかも分からない新と一緒に椅子を上げて床を掃除しながら、シドは決まり悪そうな顔をしている新を見るともなく見ていた。

「シド君、何で居るんだよ」

「白井さん、から店長に預かり物をしたんです。別に急がなくてもいい、て言われたんですがモノが鍵なんで…」

「鍵」

新が単語を繰り返して、新とシドは計らずも同じタイミングでカウンターで背中を丸めてタルトタンを食べている男を見た。高虎の前に立つ真は二人の視線を受けて、さつきシドから手渡された茶封筒を棚から出してひらひらと振る。真の顔は疲れている、というか呆れている。

「なあ高虎。これな、さつきシド君が白井さんから預かったらしいんだけど」

「俺の鍵!?!」

「かもな」

「ありがとうシド君！これでやっと家に帰れる！俺のガンブラー！」

「いえ…」

高虎は真から鍵を受け取るなり走って店を出て行った。「あいつ運動苦手なのにあんなに走ったら転ぶんじゃないか」などと真がのんびりと呟いている。床をモップで拭きあげる新の後から椅子を下ろし、テーパーを布巾で拭きながらシドは何を言ったものか迷った末に、「あの人、ガンプラ好きなんですな」と言った。それ以外何を言っても地雷になりそうな気がしたからだ。

真はカウンター周りの掃除をしながら「そうそう、あいつの部屋すごいよ」などと相槌を打つ。

狭い店の掃除は三人でやれば三十分もかからずに終わってしまった。まだ五時過ぎだ。さすがに閉店には早すぎるだろうと思うシドを尻目に真はさっさと本日閉店いたしました、の札を戸にかけてしまふ。

「新、すみこさんバスケットに入れてくれ。シド君、本当に良かったら飯……、とごめん。ああ、高虎、どうしたんだよ。鍵が違う？ じゃあお前のじゃなかったってことか……ん？ ちゃんと話せよ……うん？ うん、ああ、なるほど。いいから拉致られてるよ。じゃあな」

ぷ、と携帯の通話を切って真は凝視するシドの視線に気づいて苦笑した。

「あの鍵、高虎の部屋のじゃなくて白井さんの部屋のだったんだって」

「は？」

「詳しく聞くの怖いから電話切った」

「相変わらず冷血だな兄貴。ほら、すみこさん。どこで飯食つの」

「小枝さんのと」

「なんで週に三回は行く店なんだよ。俺の祝いだろ？」

「小枝さんのところはすみこさん居てもOKだから。あそうそう、シ

ド君。こいつ雑誌の読者アンケート今月一位になったんだって。今夜はその祝い。たかがそれくらいでなんで弟にたかれなきやいけないのかね」

「はあ読者アンケート」

「うんシド君をモデルにしたあれ。君どうしてOKしちゃったの？」

「俺、OKしてませんけど？」

シドの目が新を見る。

真も新を見た。

新は二人の視線に晒され、ぎくしゃくとバスケットをカウンターに置くと、逃げ出した。それはもう後ろも見ずに脱兎のごとく、疾風のごとく。

「……ええと、名誉毀損とかで訴えたいなら弁護士紹介しようか」

「……考えておきます」

「一応、純愛モノらしいよ」

「……」

「……ええと、あいつにはすみこさんを見習うように重々言い聞かせておくから。あ、それともこれから殴りに行く？」

「……住所、教えてください」

真が書いた住所のメモを握り締めてシドも走り去っていった。

真はバスケットを抱え、自転車に乗った。バスケットの蓋をあけると、すみこさんがでろりと広がりながら薄目で真を見た。ふう、とため息のような息をつく。

「ねえ。皆すみこさんを見習えばいいのに」

まったくだ、というようにすみこが目を閉じる。そんな、すみこ入りバスケットを荷台に載せて真は家まで自転車を漕いだ。

白馬驕不行（ハクバオゴリテユカズ）（前書き）

今回のタイトルもWaltz with the Evils様にお借りしています。太宰讃選（17題）の4話目です。

登場人物

藤堂高虎：35歳。サラリーマン。不幸な男？

白井啓介：32歳。サラリーマン。悪魔？

## 白馬驕不行（ハクバオゴリテユカズ）

白井啓介は24歳で結婚した。相手は大学時代から付き合っていた女性で同級生だったが院に進んだので結婚当時まで学生だったし、結婚してからも学生だった。院生から研究生になったのだ。学生結婚という言葉にはなにやら特別な雰囲気漂うが、二人とも成人を過ぎていたので別に誰からも反対されることなくすんなりと結婚した。

白井啓介が離婚したのは31歳の時だった。妻が研究員から講師になった翌年のことだった。大学の准教授と結婚したいから別れてくれ、と言い出したのは妻のほうだったし啓介も別に異存はなかった。彼にも当時付き合っている女性がいたからだ。

しかし双方離婚を望んでいてもこじれる場合がある。

白井啓介の離婚に至る道のりは、半年以上掛けて前人未到の山に登るが如しだったという。

「まあ、拗れた理由は今でも分からないんですけど」

離婚して一年が過ぎた今、そう白井啓介はのたまう。理由は不明だが長引き纏れた離婚協議の間に開いた壁の穴は適当に板を打ち付け本棚で隠され、割れた窓ガラスは新しいものが入っていたがフロアリングの刃物傷はそのままだ。

親から相続した一戸建てだったので、賃貸の保証に関わる面倒な遣り取りがないのは助かった、と白井は爽やかに笑う。

悪魔だ。

白井の笑みを見て、藤堂高虎はそう直感したという。その直感が高虎にとって間違っていないかったことは、後々数々の逸話で証明されることになるが、それはまた別の話だ。

高虎は玄関の前で途方にくれていた。キーリングに通しておいたはずの雑多な鍵の中、家の鍵だけが無いのだ。車の鍵や貸金庫（プレミア物のガンブラを保存）の鍵まであるというのに家の鍵だけ無いとは面妖な話だった。

「ええと、鍵をなくしたらJAFだっけ……」

呟きつつ携帯を出したがJAFの電話番号も知らないことに気づく。ようやくじわりと焦りが出てくる。残業してしまったのでもう午後九時過ぎだ。一晩泊めてくれる友達の手当たりは何人かいるが、なるべくならこれから押しかけて迷惑を掛けたくはないし、何より失くしたのは家の鍵なのだ。どこかに落としたのならまだ良いが盗まれてもしていたら、部屋は無防備なまま放置されてしまう。

（俺のガンブラ……！）

最近アニメグッズなどを盗んで売り捌く輩もいるという。大事な大事なガンブラが盗まれネットオクにかけられでもしたら、死んでも死に切れない、と高虎は玄関の前で悔し涙にくれた。

まだ盗まれてもいないのに、気の早い男である。

硬い足音がした。

女性のヒールとは決定的に違う、男の革靴の音だ。同じ階に住む誰かが帰ってきたのかと高虎が顔を上げると、思ったよりも間近に悪魔の顔が見えた。

「また泣いてるんですか」

その言葉を嬉しそうに言うのは何故だ、と高虎は思ったが、深く追求してはいけない気がして受け流した。本格的に泣いてたわけではなくちよつと涙が滲んだくらいだ、と示すように掌でぐい、と目じりを拭いて高虎は玄関前に座り込んだまま白井を見上げた。

「あのさあ、JAFの電話番号知ってる？」

「番号案内で聞けば分かりますけど、車がどうかしたんですか？」

「車はどうにもしないよ。家の鍵をなくしちゃったみたいだから部屋に入りたいたんだ」

「JAFはロードサービスで鍵屋じゃないですよ。車の鍵ならもしかしたら開けてくれるかもしれないけど。家の鍵はこの時間に呼んでも、どうなのかな……、俺の知人は鍵を開けてもらうのに電話してから三時間掛かったって言っていましたよ」

「そんな……！ あ、お前俺のうちの鍵持ってただろ！ 貸して、じゃなくて返せ」

「持ってませんよ合鍵貰ってないですもん」

「勝手に作っただろ！？ 前俺のうちに勝手に入り込んでた時があったじゃないか」

「人聞きが悪い。あの時、高虎さんの部屋の鍵開いてましたよ。無用心ですね」

「嘘だ！ 鍵だせよ」

「本当です。ほら、見てください。あんたの家の鍵なんてないですよ？」

そういつて白井がポケットから出したキーリングは、何故か高虎のものと全く同じ、スイッチを押すと目が光る、小さな緑の蛙のおもちゃがついている。雑貨屋で買えるものだが白井の趣味とも思えない。おもわず腹のところにある小さなスイッチまで押ししてしまった、両目が光ってとても怖い、なんとなく可愛くもある。おそろいですね、と白井が囁いたがそこは無視した。

高虎のものとは違ってすっきりしたキーリング、家の鍵と車の鍵、あとはどこのものとも知れない鍵。三本のどれも高虎の家のものではない。

「そんな……」

「困ってるならうちに泊まりに来てくださいよ。明日も仕事でしょ」

「お前のうちは嫌だ。それに俺のガンプラが盗まれたら困るから今

日はここで寝る」

「通報されますよ。もし盗まれていたとしても鍵が使えなきゃいいんでしょ」

そういつて白井はキーリングを入れたポケットから瞬間接着剤を出した。

使いきりタイプの蓋をぱきんと折って、鍵穴に挿入。A液の後、B液挿入。五秒で固まる優れものだ。

そう、鍵穴はがっちりと接着剤で固着されてしまった。これではたとえ鍵を持っていても、扉を壊さない限り開かない。

「ええーっ!? ちょ、なんてことしやがる！」

「俺は困ってる高虎さんを助けたいだけです。さあ後顧の憂いも無

くなつたことだし帰りましょう俺たちの家に」

「俺の家はここだ！」

「いい加減一緒に住めばいいのに。部屋は余ってるんだし、一部屋あんたのガンブラ置き場に提供しますよ。これぞモデルルームですね」

「寒いギャグでごまかすな！」

「新作の、ルバーブのタルトがあるんですよ」

だから行きましょう、と悪魔が笑った。ご丁寧に形の良い手を差し出される。この手をとつたら地獄行きだ、と高虎は思った。

でも結局はその手をとってしまったことも、高虎には分かっていた。何しろコンクリートの床に座り込んだ尻は冷えすぎてじんじんと痺れだしていたし、ルバーブの酸味の利いたタルトは魅力的だ。思わずごくりと喉が鳴る。

高虎の見上がる先に、悪魔が綺麗な笑顔を見せていた。一日中働いた後なのに、朝に見るような、疲れの見えない爽やかな笑顔だ。うわ怖い、と高虎は思った。

白井といるといつも感じるように、胸がどきどきした。それが恐怖刺激だと、高虎は気づいているのかいないのか。白井は気づかせているのか気づかせていないのか。

高虎は悪魔の手を取った。

俺はねえ、もう結婚はこりこりなんですよ。修羅場なんて一度経験すれば十分です。



と同じ名前なんだ、漢詩ぐらい知ってる」

「はあそりゃ戦国武将も清少納言も漢詩くらい知ってるでしょうけど。はは、白馬みたいに乗りこなされてみたいってことですね」

「全然違う!」

「大丈夫。行かぬ馬なら行かせてみせようほととぎすです」

「意味わからんだろそれ!」

「じゃあちよつとイってもらいましょうか、お馬さん」

「意味が違っただろソレ!」

翌日、高虎は不幸だった。

やっぱり鍵は見つからず、夕方息抜きに出かけたカフェ白菊で渡された鍵に一時狂喜乱舞したが、白井からの電話で、なんとそれは白井の家の鍵であることが判明した。その上、鍵穴に瞬間接着剤を流し込んだことで管理人に散々怒られた。鍵ごと取り替えるというので何万円も出す羽目になった。ボーナスまでまだまだあるのに、今月もピンチなのに。

おまけに鍵を取り替えるまでは部屋にも入れない。

扉の前で、今日は悲しさのあまり泣いているとまた白井が現れた。いやに嬉しそうな顔で「また泣いているんですね」といわれて余計に涙が出てきた。

今日は一日不幸だった、と高虎は思った。きっと明日も不幸だろう。

高虎は昨日と同じように差し出された悪魔の手を取った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9686x/>

---

すみこさん

2011年10月30日15時15分発行